OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批判的社会言語学の思潮　はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72803
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』(2002 年度)、『批判的社会言語学の可能性』(2003 年度)、『批判的社会言語学の射程』(2004 年度)、『批判的社会言語学の展開』(2006 年度)、『批判的社会言語学の課題』(2007 年度)、『批判的社会言語学の実践』(2008 年度)、『批判的社会言語学の展開』(2009 年度)、『批判的社会言語学の領域』(2010 年度)、『批判的社会言語学の方法』(2011 年度)、『批判的社会言語学の構築』(2012 年度)、『批判的社会言語学の展望』(2013 年度)、『批判的社会言語学の軌跡』(2014 年度)、『批判的社会言語学の潮流』(2015 年度)、『批判的社会言語学のまなざし』(2016 年度)、『批判的社会言語学のメッセージ』(2017 年度) の延長線上にある。また、この間刊行した『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』(野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年)、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』(植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年)、『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』(義永美央子・山下仁、三元社、2015 年) とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねている「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 10 数年の歳月が流れた。この間、15 人が 55 本の論文･翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」・「メッセージ」に取り組み、今年度は「思潮」をテーマとした。

2019 年 5 月 1 日、明仁は退位し、徳仁が天皇に即位、元号は平成から令和へと改められた。その際、マスメディアは意識的かそうでないかにかかわらず、一斉に天皇を頂点とする日本型ナショナリズムに基づく祝賀ムードを煽ったことは記憶に新しい。過去を反省することなく、天皇制という固定化された身分制度に対してこのように無批判な言説にはどのような「思潮」を見いだせるだろうか。もしくは、どのような「思潮」が覆い隠されてしまったであろうか。また、つくられた祝賀ムードの一方で、世界に目を向ければ先進国各国では極右が相変わらず力を持つ状態が続き、日本国内においても民族的、性的等様々なマイノリティが差別的言説にさらされている状態は何も変わらない。ここに我々はどんな「思潮」を見いだすことができるのだろうか。本プロジェクトは、このような現代社会を社会言語学の立場で、それぞれの「思潮」から批判的に捉えようとするものである。

呉論文は、台湾の学校現場で行われている郷土言語教育を取り上げた。まず郷土言語教育政策の基本理念と課程目標を概観し、当該教育にはどのようなことが期待されるかを考察した。その上で、現場教師の郷土言語の授業実践経験から郷土言語教育の可能性について検討した。

小川論文は、多言語化するルクセンブルク社会において、伝統的に行われている多言語教育と格差の問題について考察した。その上で、昨年より開始されたルクセンブルク語促進戦略と昨今のルクセンブルク語の伸長との関係について述べたのち、教育現場における独自の調査結果と関連づけて、ルクセンブルク語のあり方について今後を占う形での考察を行っている。

山下の研究ノートは、2019年11月19日にイタリアのウルビーノ大学で行ったドイツ語による招待講演の内容の抜粋である。与えられたテーマが語彙論に関する問題で、聴衆はイタリアでドイツ語を学ぶ学生、ということだったので「ポスト真実の時代における語彙論研究—日本語の敬語を例にして」というタイトルでほぼ1時間30分話した。その発表原稿のすべてを収録することは不可能であったため、前半の一部を論文の形にした。とはいえ、日本語の敬語について述べる前の「古事記」における記述の説明までで終わってしまっている。日本にはもともと文字がなく、それを補うため中国の漢字を借用したが、当初はなかなかうまく表せないということが「古事記」に書かれている。そこにすでに語彙の問題が含まれており、同時に敬語の問題も記されていることを説明したが、それらの説明は割愛せざるを得なかった。ここでは、Thea Schippanの語彙論をもとに、その基本的な考え方を説明し、それぞれの語彙に評価、もしくは価値が含まれていることなどを論じている。

植田の研究ノートは、「様々な種類の不正確な朝鮮語による表示」である「朝鮮語『どづぞ』」を扱ったものである。その類型で非規範型のうち日本語表記不全型（いずれの日本語表記法の規範にも基づかないもの）に属するものに着目し、これまでの検討で実際の多言語表示の側から部分的に触れていた日本語表記規範をめぐる問題について、規範の側からその不備な点に着目して問題の整理と若干の考察を試みた。まず現行の3種の外来語表記法・外国語表記法の規範のうち日本語表記法に係る規定を対象にその相違点と不備な点を明らかにした。その上で、日本における多言語表示と規範の不備という視点からこれらを考察した。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同